

戦後における昭和天皇の短歌—その政治的メッセージとは(三)

三 敗戦直後天皇が詠んだ四首の行方

⑥爆弾にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも

⑦海の外の陸に小島にのこる民のうへ安かれとただいのるなり

⑥⑦は、『おほうなばら』に「終戦時の感想二首」として収録されている。が、それまで公刊されていた、いわば宮内庁お墨付きの『みやまきりしま』、『あけぼの集』には見当たらない作品である。これらの公刊歌集に採択掲載されなかった理由が不明瞭としながらも、昭和天皇の「自己証明ないし自己正当化のための「私歌」であったかもしれない」とする考察もある（坂本孝治郎『象徴天皇制へのパフォーマンス』山川出版社 一九八九年）。しかも、終戦時に詠んだ歌は、これだけではなかった。敗戦直後一九四五年一〇月から翌年五月まで侍従次長を務めた木下道雄の日誌のなか、一九四五年一二月一五日の記述によれば、この二首のほかに⑧⑨という二首も記録され、上記⑦は、改作前と思われる⑦'の形で載せられていた。さらに、木下は「御製を宣伝的にならぬ方法にて世上に洩らすこと御許しを得たり」ともある（木下道雄「側近日誌」『文芸春秋』一九八九年四月）。

⑦' 外国と離れ小島にのこる民のうへやすかれとたたいのるなり

⑧みはいかになるともいくさととめけりたたたふれゆく民をおもひて

⑨国からをたた守らんといはら道すすみゆくともいくさとめけり

同年一二月二九日の宮内記者会で、元旦用に紹介された作品は⑦の一首のみであった。

「終戦時の天皇の短歌四首」の去就を時系列で追ってみるとつぎのようになる。⑥⑧⑨の三首を国民が知り得るのは、一九六八年になってからの木下道雄の著作（『宮中見聞録』一九六八年）であった。さらに広く知れわたるのは、昭和天皇没後の『文芸春秋』発表後だった。作歌時から四三年後のことである。⑥「身はいかならむとも」の字句が意味することのなまなましさ、⑧⑨の自己弁護的な内容に鑑み公表を控えたものが、後年、天皇の心情はここにあったとする「心情吐露的」な解釈によって流布される現実を目の当りすることになった。同じ短歌作品が作歌時とは別の役割が付与された例といえるのではないか。天皇の短歌が、天皇の作歌時の側近ないし宮内庁サイドの長期間に及ぶ操作の対象になっていたことはつぎの資料でも確かになった。

一九三六年昭和天皇の侍従となり、後、一九六九年侍従次長、一九八五年侍従長となった徳川義寛は、前記木下の日誌の記述は、天皇の草稿をそのまま写している点を責めながら、⑧について、「これはいけない」、「『みはいかになるとも』が初めに来てはいけない」、⑨について「（発表）をやめた歌」という主旨の記録を残している（徳川義寛『侍従長の遺言—昭和天皇との50年』朝日新聞社一九九七年二月）。また、徳川は、天皇の短歌は「入江相政さんや私が拝見して整えて」から御用係りに見てもらうという手順を踏んでいたことも明らかにしている。

終戦時の天皇の短歌四首

(天皇の歌集)	(刊行年)	(収録状況)
元旦新聞報道 (新聞各紙)	1946年	⑦
『みやまきりしま』(毎日新聞社)	1951年	なし
『宮中見聞録』(新小説社)	1968年	⑥⑦' ⑧⑨
『あけぼの』(読売新聞社)	1974年	なし
『昭和の御製集成』(毎日新聞社)	1987年	⑦
(1989年1月7日天皇没)		
「側近日誌」(『文芸春秋』四月号)	1989年	⑥⑦' ⑧⑨
『おほうなばら』(読売新聞社)	1990年	⑥⑦
『昭和天皇御製集』(講談社)	1992年	⑦
『昭和天皇のおほみうた』(不二歌道会)	1995年	⑥⑦⑧⑨

(『ポトナム』2007年4月号所収)